

■ NPO法人から企業へ、企業からNPO法人へ、お互いの要望事項を知る!

カルビー(株)清原工場のケースは、“NPO法人と企業との協働”の好事例であるが、ここで、両者の協働に関する貴重な調査結果をご紹介します。栃木県県民生活部が実施した、ズバリ「企業とNPO等との協働実態調査報告書」(2018年3月)だ。お互いに“求めるものは何か”が鮮明になっており、CSRやSDGs関連の活動を進める企業にとっても、活動のバックアップを求めるNPO法人にとっても、貴重な情報になっている(図表1)。

図表1 企業とNPO法人の相手側への要望事項
(NPO法人の企業への要望事項) NPO法人から企業へ (%)

1位: 寄付金や助成金などの資金の提供	48.8
2位: 地域活動のパートナーとしてのNPO等の認識	40.4
3位: 地域活動に関連する技術・ノウハウなどの情報公開	24.6
4位: 企業トップの地域活動への関心	24.1
5位: 地域活動担当者の設置	18.2
6位: NPO等への理解について社内での合意形成	14.3
6位: 役員やボランティアなど人的資源の提供	14.3
8位: 会議室や運動場など施設の開放	12.3

(企業のNPO法人への要望事項) 企業からNPO法人へ (%)

1位: 地域住民と密接な関係を有していること	25.7
2位: 実績が豊富であること	23.1
3位: 協働のメリットを提示する能力があること	20.8
4位: 企画力があること	17.7
5位: 情報公開度が高いこと	16.7
5位: ネットワークを持っていること	16.7
7位: コミュニケーション能力があること	12.1
8位: マネジメント能力があること	10.8

(注)3つまでの複数回答の結果。
資料: 栃木県県民生活部「企業とNPO等との協働実態調査」
2018年(平成30年)3月

まず、NPO法人が企業へ求める内容から見ると、やはり1位は「寄付金や助成金などの資金の提供」(48.8%)だ。今般の一連の

NPO法人への取材でも、多くの関係者から聞かれた切実な声である。2位にあがっているのは、「地域活動のパートナーとしてのNPO等の認識」(40.4%)、つまり自分たちをもっと知って欲しいという声である。そして、3位「地域活動に関連する技術・ノウハウなどの情報提供」(24.6%)と続いている。NPO法人から見れば、企業にアプローチしたくても、“敷居が高く、情報もオープンではない”と映っているのだろう。

一方、企業側からNPO法人に対する要望事項を見ると、1位は「地域住民と密接な関係を有していること」(25.7%)、2位「実績が豊富であること」(23.1%)、3位「協働のメリットを提示する能力があること」(20.8%)、4位「企画力があること」(17.7%)と続いている。プレゼン力、企画力、NPO法人側にも、もっと磨くべき点は多いようだ。

調査を実施した栃木県県民生活部では、「NPO法人と企業との間で意識や考え方などに差があるのが分かる。両者の活動を協働して進めるためには、この差を埋めるところから始める必要がある」との見解だ。

前掲の橋本氏の言葉どおり、社会的課題の解決には多くのステークホルダーが力を合わせる必要がある。それぞれがお互いの存在をリスペクトし、それぞれの強みを伸ばして弱みを補完し合う、そんな豊かな関係性が構築されている社会が望まれる。

■ サッカースクールを運営、人づくり、地域づくりに取り組む大学サッカー部監督

レポート最後にご紹介するのは、小・中学生のためのサッカースクールを運営するNPO法人「Glicina足利」(足利市大前町)の

谷田部将司氏だ。母校の足利大学(前足利工業大学)の職員として勤務しながら、同大学のサッカー部監督を20年あまり続け、そして3年前に自らが中心となり「Glicina足利」を立ち上げた、マルチで熱い方である。

「Glicina足利」は、一言で表せば“サッカーの私塾”だ。足利大学のグラウンドを利用して、初心者から代表候補レベルまでの幅広い層の子供達を、U-8(小学1、2年生)、U-10(小学3、4年生)、U-12(小学5、6年生)、U-15(中学生)、女子(小学1年生~中学3年生)の 카테고리に分けて、週1~3回スクールを行っている。ここでは、技術面やフィジカル面の向上だけでなく、洞察力・行動力・相手へのリスペクトなどの人間性を磨くことにも注力し、「一人の人間として大成し、世界に通用する“人間育成”を目指している」(「Glicina足利」HPより)。



Glicinaはサッカー好きの少年が集まる“私塾”だ

コーチングスタッフは、谷田部氏のほか足利大学サッカー部OBや現役大学生のサッカー部員など充実した体制だ。そして“塾生”の数は、6年前にスクールを始めた当初は30人程度だったが、3年前にNPO法人化したことも奏功して、今では130人になるというから、その規模感には驚きだ。

足利大学に谷田部氏を尋ね、NPO立ち上げの思いや現在の運営状況などについて話をお伺いした。

「それまで任意団体で動いていたサッカースクールを3年前にNPO法人化したのは、資金面の透明性を高め、活動報告などもきちんとして、助成金の受入れやスポンサーなどの受入れ環境を整えたかったこともあるが、地域の少年達にサッカーを続けられる環境を提供したかったことがより大きい。足利市にもサッカーの“クラブチーム”はあるが、ここは選ばれた一部の子供が行ける場所だ。多くのサッカー好きの少年達の居場所を作りたかった。それから、中学校が一番の課題で、中学校でサッカーの部活がないところが少なくない。サッカー好きで頑張っている子供達をお預かりして、足利が元気な街になればと思っている。そして、いずれはサッカーだけでなく、スクーリングの種目を増やしていき、総合スポーツ組織にできればと思っている。サッカーをやっている子供が、違うスポーツで開花することもよくあることだ。そんなスクールにするのが今の夢である」。

“Glicina”の名称は、スペイン語で「藤」の意味から名付けたという。「やさしさ」、「決して離れない」などの花言葉がある「藤」。人間性豊かで、地域への愛情溢れる谷田部氏が率いるNPOに相応しい名前である。

9月号、10月号と2回にわたり、社会的な課題に取り組むNPO法人などのリーダーをご紹介します。リーダー達の“熱さ”が読者に伝わったでしょうか。素晴らしい人たちが、この地で貴い汗を流している。(了)